彙　　報

1993年（平成５年）１月～1993年（平成５年）12月

研　究　状　況

Ⅰ　班　研　究

日　本　部

近世前期における政治的主要人物の居所と行動

班長　藤井　譲治

近世前期の政治過程は，機構・組織よりも政治的主要人物の人間関係に即して展開するものであり，それゆえにこの時期の政治史，さらには文化史を考えていくためには，彼等のそれぞれの時点での居所と行動を解明する作業が不可欠である。本研究では，まず政治史上価値の高い文書であるにもかかわらず，年紀がないゆえに十分に利用されてこなかった中井家文書，永井家文書の年代を可能な限り確定するとともに，主に上方支配に重要な役割を果たした人物を中心に20人について，その居所と行動の解明にあたった。報告書は1993年度中に発行の予定である。

1993年

１月11日	徳川秀忠の居所と行動	藤井
１月25日	小堀政一の居所と行動	藤田
２月８日	慈性の居所と行動	母利
４月12日	五味豊直の居所と行動	藤田
４月26日	徳川家光の居所と行動	藤井
５月10日	大久保長安の居所と行動	杣田
５月24日	板倉重宗の居所と行動	塚本
６月14日	永井直清の居所と行動	藤井
６月28日	小野貞則の居所と行動	母利
７月12日	板倉勝重の居所と行動	横田
９月13日	島田直時と久貝正俊の居所と行動	宮本
９月27日	中坊秀政の居所と行動	杣田
	永井家文書	藤井
10月25日	中坊時祐の居所と行動	杣田
	曽我古祐の居所と行動	塚本
11月８日	井伊直孝の居所と行動	母利
11月29日	徳川家康の居所と行動	塚本
12月27日	小野貞則の居所と行動	母利
	大久保長安の居所と行動	杣田
	板倉勝重の居所と行動	横田

近代東アジア世界の構造連関　班長　古屋　哲夫

概してこれまでの「東アジア」研究は，東アジア諸地域におけるナショナリズムの発展を背景として，それぞれの社会・国家の自立化を対象とする一国史的研究とその比較という形で展開してきた。そのために，この地域の諸民族が「東アジア」世界における多面的な相関関係を規定しかつ規定されながら発展するという側面には十分な関心が払われてこなかったといえる。われわれは，近代「東アジア」において取り結ばれたこうした諸関係を総体としてとらえ，その起源と展開をあきらかにしたい。

とりあえずは日本部全体の研究会として発足し１年を経過したが，関心のある所内外おおくの方々の参加を呼びかけたい。

班員　古屋哲夫　飛鳥井雅道　落合弘樹　斎藤希史　佐々木克　塚本明　藤井譲治　水野直樹　安冨歩　山室信一　山本有造　横山俊夫（以上所内）

1993年

１月18日	貝原益軒と「ひとの国」	横山　俊夫
２月15日	古代・中世東アジア世界の貨幣的構造連関	安冨　歩
４月19日	東アジアの相互意識	落合　弘樹
５月17日	サンジンソウにことよせて	横山　俊夫
６月７日	「征韓論時代」の東アジアにおける	

国際環境　佐々木　克
6月21日　東アジアにおける「近代」を考える　古屋　哲夫
7月5日　「東アジア」銀圏の形成・展開・消滅　山本　有造
9月20日　アメリカにおける朝鮮関係資料について　水野　直樹
10月4日　ある大陸浪人の伝記　斎藤　希史
10月18日　打合せ　全員
11月15日　武士の国家と国家意識　藤井　譲治
12月6日　打合せ　全員

文学からなにが見えてくるか　班長　飛鳥井雅道

研究班は最終年度に入ったが，班員の研究報告を行う本報告部会と並行して，日本最初の「翻訳小説」である『漂荒紀事』の会読部会も引き続き進められている。

両部会に共通しているのは，ともに日常性からの「異境」「異界」を意識していることであり，本報告も，会読部会も，いわゆる「近代」文学論には立っていない。またあえて，意識的に，日常からの脱出がどのように文学のテーマとなってゆくか，そしてそれがいかに表現されてゆくかに，力点をおいた報告が積み重ねられている。日本の近世・近代が対象の中心になっていることは事実だが，東アジア，さらにロシア・フランス・ドイツなどの地域における文学の転換・変貌も報告の主要テーマの一つとなっている。

また，本報告と会読とでそれぞれの報告書を作成する予定で，1994年3月の班終了に向けてすでに準備にとりかかっており，ひとまず本報告の成果が先に刊行されるが，会読部会はさらに集約的な検討が必要であり，若干の日時を要することとなろう。

1993年
2月10日　『漂荒紀事』会読　木村
2月24日　打ち合わせ
4月14日　『漂荒紀事』会読　木村
4月28日　レールモントフ『仮面舞踏会』木村
5月12日　『漂荒紀事』会読　米井
5月26日　鏡花をめぐって　須田
6月9日　『漂荒紀事』会読　米井
6月23日　能におけるリアリズム　藤田
6月30日　『漂荒紀事』会読　谷川
7月21日　『漂荒紀事』会読　谷川
9月22日　『漂荒紀事』会読　生田
10月6日　『漂荒紀事』会読　生田
10月13日　冒険の文体　斎藤
11月24日　異化作用としての翻訳　生田
12月8日　『漂荒紀事』会読　斎藤

班員　飛鳥井雅道　宇佐美齊　大浦康介　落合弘樹　佐々木克　鈴木啓司　富永茂樹　藤田隆則　斎藤希史（以上所内）　池田浩士　加藤幹郎　木村崇三原弟平　若島正　松田清（以上総合人間学部）生田美智子　須田千里（光華女子大）　谷川恵一（高知大）　林完枝（大阪市大）　米井力也　平田由美　藤元優子　松村耕光（以上大阪外大）　堀田桂子（民博大学院）　濱田秀（神戸大大学院）

「大東亜共栄圏」の経済構造　班長　山本　有造

先の山本班『「満州国」の研究』の終了をうけ，対象を「大東亜共栄圏」に広げようとしたものであるが，当面は経済史に分析対象をしぼり，intensiveな共同研究を行いたい。できれば，いずれ予定する『「大東亜共栄圏」の研究』のための準備会的性格をも持たせたいと考えている。現在，水曜日隔週に研究会を開いている。

班員　山本有造　安冨歩（以上所内）　木村光彦（帝塚山大）　平井広一（北星学園大）　松本俊郎（岡山大）　山田敦（大阪市大・院）

1992年
4月21日　打合せ会　全員
5月19日　台湾史研究の現状　山田
書評『（岩波講座）近代日本と植民地』第1巻・第2巻　山本・木村
6月2日　アフリカにおけるColonial Impactの評価について　北川勝彦
書評，同上書，第3巻・第4巻　安冨・松本
6月23日　植民地独立と途上国開発政策の登場　松永　達
書評，同上書，第5巻・第6巻　木村・山田

7月7日　日本における植民地史研究の現状と展望　山本
書評，同上書，第7巻・第8巻　安冨・松本
8月3日　（臨時研究会）シンポジウム「日本における植民地史研究の新しい地平」準備会　全員
10月6日　「大東亜共栄圏」構想とその構造　山本
10月20日　戦間期における樺太植民地財政の展開　平井
11月10日　書評『「満州国」の研究』第3部　平井・木村
12月1日　「満州国」が残した鉄鋼業資産　松本

転換期における個人と組織　班長　佐々木　克

歴史の転換期において，個人がどのように生活し，いかに生き，あるいは生きざるをえなかったのか，有名，無名の群像の，ライフスタイルを明らかにすることを，この研究は第一の課題としている。班員各自が，一人あるいは複数の人物を担当することにしたが，当面対象とする人物は，政治家，志士，公家，大名，幕臣，学者，豪農，老農，村役人，そして侠客，女性等々，多様・多彩な群像が選ばれた。この研究は，限られた史料と時間的制約があるため，かならずしも対象とする個人の伝記的研究をめざすものではない。むしろ転換期における社会ならびに組織と個人との関わり，という問題に比重を置いている。さらにもう一つの問題は，まとめの段階での課題でもあるが，個々人の生活史を集合し，検討を加えることによって，その時代の社会のイメージと断面を，浮かび上がらせる事ができると考えており，この課題をも，常に心に留めて，研究を進めて行くことにしたい。なお転換期をある時期と特定していないが，班員の研究領域と問題関心の関係から，主に明治維新期が中心となる。

班員　佐々木克　飛鳥井雅道　落合弘樹　塚本明　藤井譲治（以上所内）　青山忠正（大阪商業大）　池田宏（滋賀県立図書館）　奥村弘（神戸大）　小股憲明（大阪女子大）　勝部真人（大阪教育大付高）　鈴木祥二（立命館大）　鈴木栄樹（京都薬大）　谷山正道（天理大）　辻ミチ子（京都文化短大）　原田敬一（仏教大）　手島一雄　岸本覚（以上立命館大院生）　三沢純（広島大院生）

1993年

1月29日　石川理紀之助をめぐる老農群像　勝部
2月12日　猪飼隆明『西郷隆盛』をめぐって　三沢
4月23日　長州藩元治内乱における鎮静会議員と干城隊　岸本
5月14日　北多摩の民権家松村弁治郎の軌跡　落合
5月28日　西郷隆盛と西郷伝説　佐々木
6月11日　尚歯会の人々…遠藤勝助と渡辺華山を中心に…　鈴木祥
6月25日　『贈従一位池田慶徳公御伝記』をめぐって　青山
9月24日　明治期の不敬事件　小股
10月8日　鳴物停止・強要された「慎」の成立，展開，崩壊　飛鳥井
10月22日　大三輪長兵衛の実業と政治　原田
11月7日　名望家武井右衛門について　奥村
12月3日　大蔵省時代の吉田清成　鈴木栄

西　洋　部

記号・意味・文学　班長　大浦　康介

この研究班は，文字一般に関する理論的探究をその目的とする。「文字とは何か」という古くかつ新しい問題を中心に据え，構造主義以降の言語学・記号論的成果を批判的に踏まえつつ，文学理論の新たな地平を美学，心理学，社会学など他の学問の領域とも関連づけながら摸索しようとするものである。三年目にあたる今年は，報告書作成に向けて，以下のようなスケジュールで研究発表および原稿検討会をもった。

班員　大浦康介　宇佐美齊　斎藤希史　鈴木啓司（以上所内）　田口紀子　吉田城（以上文学部）　多賀茂（総合人間学部）　石田英敬（東京大）　大石雅彦（同志社大）　小西嘉幸（大阪市大）　小山俊輔（立命館大）　丹治恒次郎（関西学院大）　ピ

エール・ドゥヴォー（甲南女子大）　山路龍天（同志社大）　山田広昭（神戸大）

1993年

2月13日　『紅楼夢』を読む　山路
2月27日　小説における現在形の意味と小説世界の構造　田口
3月13日　翻訳・韻文・散文　宇佐美
3月27日　模倣と起源－18世紀の芸術論をめぐって－　小西
4月26日　L'Evocation des *Chouans* (Balzac) dans *Les Eaux étroites* V (Gracq) : une interlecture?　ベルマン＝ノエル（ゲスト講演）
5月24日　報告書作成にあたっての提案　大浦
6月7日　Berlioz : dissonances d'Euphonia　ドゥヴォー
6月21日　原稿検討会　鈴木
7月5日　原稿検討会　大浦
10月4日　原稿検討会　大浦・吉田
10月25日　原稿検討会　小山・鈴木
11月29日　原稿検討会　山田・田口
12月20日　原稿検討会　多賀・山路

『儀礼的暴力の研究』　班長　田中　雅一

本研究班では過去三年間の討論を踏まえ，暴力現象を1）社会，宇宙の再生に積極的に関与する暴力（供犠，宗教的苦行，火渡り），2）社会統制に関わる実体的暴力，3）伝統的暴力装置の近代における変化，4）暴力の理論の四領域に分けて，理解を深めた。報告では総合人間学部の福井勝義氏，ロンドン大学（LSE）の J. P. Parry 教授，民博客員研究員の S. Simonse 博士に特別講演を依頼することができた。

班員　田中雅一　井狩彌介　佐々木博光　鈴木啓司　谷泰　富永茂樹　藤田隆則（以上所内）　松田素二（文学部）　菅原和孝（総合人間学部）　青木恵理子（民族学振興会）　阿部泰朗（大手前女子大）　大越愛子（近畿大）　大塚和夫（都立大）　小田亮（桃山学院）　春日直樹（奈良大）　川村邦光　松村一男（以上天理大）　栗本英世　小長谷有紀　田辺繁治　吉田憲司（以上民博）　滝口直子（大谷大）　長嶋佳子（大阪学院大）　三浦耕吉郎（関学大）　棚瀬慈郎　西井涼子

1993年

1月18日　攻撃性の文化誌：東アフリカ牧畜民の家畜をめぐる社会化　福井勝義（ゲスト）
2月1日　交換と非交換性：＜幹なる嫁＞と＜大地の子＞　青木
2月15日　ポルノグラフィー論争の意味するもの　大越
3月1日　共同体の実践暴力の行方　松田
3月15日　シャリバリ儀礼の転用をめぐって(2)：理論的パースペクティヴ　三浦
3月15日　巫女と力　川村
3月26日　On Hierarchical Complementarity　Parry
4月2日　今後の方針　谷・田辺・菅原・田中
6月7日　King-Killing and Social Consensus in the Nilotic Sudan　S. Simonse
6月21日　Regicide and Complementary Opposition　S. Simonse
7月5日　Schismogenesis and the Structural Stability of Nilotic Politics　S. Simonse
10月4日　暴力・贈与・共同体　小田
10月18日　アニュワーヌエル関係の現代的展開：民族間関係と外部勢力　栗本

コミュニケーションの自然誌　班長　谷　泰

身体，音，言語などコミュニケーショナルな行為表象のレフェラントの階層性，自己言及を含めた指示作用，意味連関性，社会行為としての力などの問題が，基本的作業前提としての協調性の問題とともに追及すべき論点として提出された。本研究班は，おもに社会的インターラクションの現場資料をもとに分析を行い，より適切な記述の言語をチェックすることを目的としているが，今年はそのような具体資料の検討のほか，理論言語学，文学などの分野からのゲストをも招いて討論を行った。来年からは，上記の問題点をより徹底して追求すべく同種の研究

会を続ける予定であるが，一応三年目のまとめとして，これまで収集した現場資料をまとめた資料集を刊行する予定である。

班員　谷泰　田中雅一　藤田隆則（以上所内）細馬宏通（理学部）　菅原和孝（総合人間学部）北村弘二（弘前大）　木村大治（福井大）　串田秀也（大阪教育大）　高畑由起夫（鳴門教育大）　野村直樹（名古屋女子商科大）　沢田昌夫（山口大）野村雅一（国立民族学博物館）　早木仁成（神戸学院大）　深尾葉子（大阪外大）　水谷雅彦（神戸大）宮脇幸生（大阪府立大）

1993年

1月11日　サンの会話の連関性をめぐって　菅原
3月8日　野性チンパンジーのサファリ行動　早木
4月26日　中間総括　谷
5月10日　菅原和孝『身体の人類学』合評会　田中・木村
5月24日　あいさつと出会い　野村（雅）
6月14日　二重拘束論とすりかえ理論をむすぶ概念　野村（直）
6月29日　誘惑について　大浦
7月12日　会話におけるトピックの組織化について　串田
9月13日　聞き手領域といわゆる「共有知識」について　田窪
9月26日　共有知識をめぐるトラブル　細馬
10月25日　笑いの自己言及的文脈指示能力の考察から　谷
11月8日　サンの言語行為論　菅原
11月22日　歌の上演における独唱形態と合唱形態　藤田
12月5日　はたして記号は失われたか－　高畑

象徴主義の研究　　班長　宇佐美　齊

4年間の予定で1993年4月より発足したこの研究班の目標と活動内容の概略は，以下の通りである。

フランスを中心とするヨーロッパの文学テクストを主な対象として，象徴主義が提起した問題とは何かを問うことから始める。その際，音楽・美術・演劇などの諸芸術との関わり，政治や社会の変動が及ぼした影響，思想史的なコンテクスト，および中国・日本など非ヨーロッパ諸国との比較対照の視点をも重視する。ついでそれらの諸問題がその後どのような展開を遂げたかを問う。特に20世紀初頭のアヴァン・ギャルド芸術を，象徴主義のひとつの展開，結実あるいは変貌として見とどけたい。したがって時代区分としては，19世紀中葉から1920年代までを視野に収める。

なお本年度は初年度でもあり，共同研究の準備と基礎がためとをめざして，各班員の個人研究と象徴主義との接点を摸索することに重点を置いた口頭発表がなされた。

班員　宇佐美齊　大浦康介　阪上孝　鈴木啓司（以上所内）　小林満　田口紀子　吉田城（以上文学部）　多賀茂　松島征（以上総合人間学部）　柏木隆雄　上倉庸敬（以上大阪大）　山田広昭　吉田典子（以上神戸大）　内藤高　山路龍天（以上同志社大）　柏木加代子（京都市芸大）　小西嘉幸（大阪市大）　小山俊輔（立命館大）　島本浣（帝塚山学院大）　丹治恆次郎（関西学院大）ピエール・ドゥヴォー（甲南女子大）　中井敦子（徳島大）　丸岡高弘（南山大）　三野博司（奈良女子大）

1993年

5月8日　象徴主義をどう考えるか　宇佐美
6月21日　ロマン主義における象徴論－Cousin, Jouffroy, Leroux　丸岡
7月19日　L'épisode du《miroir qui revient》dans Le miroir qui revient d'Alain Robbe-Grillet : lesenjeux d'une figure symbolique Bellemin-Noël ＜殺人＞を語るということ－カミュの場合　三野
9月20日　物語における象徴の場－中心紋の手法（mise en abyme）についての考察－　松島
11月1日　Le Chef-d'œuvre inconnu, roman d'amour ou roman d'art?　柏木

11月15日　啓蒙の絵画論－ド・ピールを手がかりとして　島本
12月13日　Bouvard et Pécuchet についての一考察　柏木（加）

ステイタスと職業　班長　前川　和也

工業化以前の諸社会での「職業」がもっていた意味をさぐっている。二年目の今年度は，「職業」がどのような社会的威信を保持していたか，身分制度の揺らぎと職業，さまざまな分野での「専門」職の成立が，中心課題として，報告・討論された。

班員　前川和也　佐々木博光　田中雅一　横山俊夫（以上所内）　服部良久　夫馬進　南川高志（以上文学部）　川島昭夫（総合人間学部）　阿河雄二郎　脇田晴子（以上大阪外大）　井上浩一　大黒俊二（以上大阪市大）　川北稔　江川温（以上阪大）　川本正知（奈良産業大）　小山哲（島根大）　鈴木利章（神戸大）　波多野敏（京都学園大）　早川良弥（梅花女子大）　三成美保（大阪経法大）　森明子（国立民博）　山辺規子（奈良女子大）

1993年

1月12日　近世期フランスの貴族意識－フランク人のガリア征服をめぐる議論　阿河
1月19日　訟師－前近代中国の訴訟プロ　夫馬
1月26日　19世紀フランスにおける精神医学者　波多野
2月2日　賤民－ヨーロッパの＜名誉なき人々＞　佐々木
4月20日　『家族・世帯・家門－工業化以前の世界から』合評会　全員
4月27日　16世紀ポーランドの『三職分経綸問答』　小山
5月18日　大ざつしよの持主　横山
25日　ローマ帝政時代の騎士身分　南川
6月1日　訟師秘本とその世界　夫馬
6月15日　19世紀イギリスのプロフェッショナリズム－薬剤師を中心に　村岡（甲南大）
6月22日　日本中世の分業と身分制－被差別民を中心として　脇田
9月14日　12・13世紀ボローニア大学をめぐる問題から　山辺
9月28日　古代メソポタミアの身分・ステイタスと職業　前川
10月5日　教区記録からみたパーソンの概念　森
10月19日　ガードナー・ナースリーマン・シーズマン－植物をめぐる職業の成立　川島
10月26日　中世末期の貴族身分－デロジアンスとアノブリスマン　江川
11月2日　イギリスにおけるステイタス基準の展開－Languages of Social Discrimination　川北
11月16日　石か種子か－T. I. Olivi のインテレスト論　大黒
12月7日　中世盛期ドイツのホーフ・カペラン（宮廷司祭）について　早川
12月14日　イブン・ハルドゥーンの経済論－労働価値説と分業論　川本

知識と秩序（II）　班長　阪上　孝

1990年に発足した本研究班は，近代社会の誕生とともに登場する「社会技術」的な知識と，それが作動するさまざまな空間（家族，学校，国民社会など）との関係について，大革命期のフランスをはじめとする西洋諸国と日本とを対象に研究会を積みかさねてきた。最終年度をむかえた本年は，研究報告書における論文執筆をめざして，各班員による研究発表を継続し，さらに，これまでの研究会で得られた論点，知見を総括する作業を進めている。

班員　阪上孝　富永茂樹　大浦康介　上野成利　光永雅明（以上所内）　浅田彰（経済研）　木崎喜代治（経済学部）　小川伸彦（文学部）　石井三記（東海大学）　市田良彦（大阪女子大）　小西嘉幸（大阪市大）　小林清一（滋賀短大）　西川長夫（立命館大）　牟田和恵（甲南女子大）　水嶋一憲

1993年

1月22日　「救貧法」について－“moralisation”の観点から－　光永
2月26日　Le Citoyen Sade en 1793－サド

の“opportunisme”をめぐって　大浦
4月23日　De la Bastille à Bicêtre－Comment peut-on devenir un citoyen?－　富永
5月14日　市民社会と規範－M.ホルクハイマーの視座から－　上野
5月28日　知識の制度化－共和国三年のエコール・ノルマル－　阪上
6月18日　明治期における respectability と家族　牟田
6月25日　革命とコード化－フランス革命期の民法典の問題－　石井
7月16日　法と商業と「デモクラシー」　小林
7月30日　研究報告書検討会　全員
9月24日　市民の分割－「人間と市民の権利宣言」のパフォーマンス(2)－　水嶋
10月8日　医学と統計の交錯－Comment peut-on devenir un citoyen?(2)－　富永
10月22日　リベラルな統治法－救貧＝移民論からみたその構造－　光永
11月19日　フランス革命と陪審制　石井
11月26日　産業主義の社会組織論　阪上
12月3日　近代日本における「国民」の生成と「家庭」イデオロギー　牟田
12月17日　サドについてのまとめ－作品に戻って－　大浦

古典インドの法と社会　班長　井狩　彌介

「法（ダルマ）」は，インド文明の構造を理解するためにもっとも重要な鍵となる概念である。「ダルマ」の観念は，古典インドはもとより現代に至るまで，インド文明の社会秩序と文化規範の思考の枠組みの基調低音をなすものとして機能し続けてきた。このような「ダルマ」を中心主題として編纂された文献群が「法典」である。本研究班は，ヒンドゥー社会の行為準則集として成立した古典インド法典の形成期に焦点をあててきたが，法典を狭義の法律集成として扱うのでなく，いわばヒンドゥー教文化を映す鏡として扱う立場を打ち出している。具体的には，「ヤージュニャヴァルキア法典」を取り上げ，インド学各分野の専門家の協力のもとに，その文体と内容の分析を行いつつ，本法典の成立過程と内容の歴史的位置づけを検討する事を作業課題としている。本年は第三年度に当たり，これまでに本法典の約四分の三に相当する部分の検討を終えている。

班員　荒牧典俊　井狩彌介　藤井正人　船山徹　山下正男（以上所内）　徳永宗雄　御牧克巳（以上文学部）　赤松明彦（九州大）　永ノ尾信悟　土田龍太郎　横地優子（以上東京大）　榎本文雄（華頂短大）　狩野恭　黒田泰司　八木徹（以上大阪学院短大）　後藤敏文　後藤純子　伏見誠（以上大阪大）　島岩（金沢大）　正信公章　渡瀬信之（以上東海大）　高島淳（東外大ＡＡ研）　竹中智泰（常葉学園大）　中谷英明（神戸学院大）　林隆夫（同志社大）　引田弘道（愛知学院大）　矢野道雄（京都産大）　松田祐子（国際仏教大）　乙川文英　杉田瑞枝　山下勤（以上京都大Ｄ．Ｃ．）　梶原三恵子（大阪大　Ｄ．Ｃ．）

正義システムの諸相　班長　山下　正男

本共同研究班は義務論理学を強力な武器として援用しながら次の三つの順序で正義論の諸体系を研究するものである。(1)正義の観念論的諸体系，(2)正義の法的諸体系，(3)正義の法的諸体系のサバイバル・テスト。

本研究班は以上三項目のうち，(2)を中心テーマとするものである。すなわち各種実定法がいかなる正義をどの程度表現しているのか，また現行の実定法からこぼれ落ちている正義があるとすれば，どのような実定法を新たに追加すべきかが，(2)のテーマである。しかしそうした実定法の背後には，宗教的，哲学的，ユートピア的といったさまざまの観念的正義体系が潜んでいるはずであり，(1)では思いきり拡大された視野によって正義の問題を考察したい。最後に(3)においては，過去の，あるいは現存のいろいろな法体系が，その法体系を受け入れた集団あるいは集団のメンバーを無事に存続させえたか，させえなかったか，またさせうるのか，させえないかに関するテストの可能性を論ずるものである。

班員　山下正男　井狩彌介（以上所内）　足立幸

男（総合人間学部）小越義雄　川浜昇　田中成明　山本克己　山本敬三（以上法学部）　浜野研三（文学部）　阿部昌樹（大阪市大）　今井弘道（北大）　植松秀雄　江口三角（以上岡山大）　亀本洋（金沢大）　玉木秀敏（大阪学院大）　中山竜一（近畿大）　服部高宏（国学院大）　平井亮輔（京都工繊大）平野仁彦（三重大）　深田三徳（同志社大）　松浦好治（大阪大）　森際康友（名古屋大）　山本顕治（滋賀大）　若松良樹（東和大）　アスキュー・デイビッド　植木一幹　樺島博志　那須耕介　ノッテジ・ルーク　福井秀樹　耳野健二　毛利康俊

1993年

1月22日	人間の本性の存在とその道徳的意味	浜野
5月21日	F・ハフトの「交渉術」論	服部
6月11日	法の不確定性とプラグマティックな法学の可能性	グレッグ
6月25日	フェアネスとしての正義と論理学	山下
7月9日	人権概念をめぐる諸理論について－国際人権法を中心にして－	深田
9月24日	事故法における正義	浅野
10月8日	正義感覚と法行動	阿部
10月22日	民族と国家－国家における自由の第三段階－	森際
11月5日	法・正義・歴史－とりわけF・エヴァルドを中心としたフーコー派正義論に関して－	中山
11月26日	契約と日常的正義	ノッテジ
12月10日	帰国報告	亀本・川浜

本研究班は平成5年度をもって終了し，平成6年度内に成果を発表する予定である。

東　方　部

中國語史の資料と方法　　班長　高田　時雄

1990年4月から3カ年の豫定で始まった本研究班は，本年3月を以て終了した。標記のテーマに基づいて報告され，討論された三年間の共同研究の成果は1994年3月に論文集『中國語史の資料と方法』として刊行の豫定である。

中國語音韻史の研究　　班長　高田　時雄

今年度より五カ年の計畫で始まった本研究班は，一般の書目には著録されることの稀な明清の韻學關係の書物を取り上げ，序跋や凡例の會讀を通じて，明清の音韻史を辿ろうとするものである。最終的には，『小學考』の補編ともいうべき明清の音韻學書の提要の作成を目的とする。今年度は，『洪武正韻』（佐々木猛擔當），『正音通俗表』（岩田憲幸擔當）の序跋，凡例を讀了した。以後の會讀豫定資料および擔當者は以下のとおり。

西儒耳目資（高田時雄），五方元音（木津祐子），等韻一得（矢放昭文），書文音義便考私編（平田昌司），切韻聲原（佐藤晴彦），山門新語（木田章義），音韻日月燈（岡島昭浩），韻學集成（淺原達郎），李氏音鑑（森賀一惠），潮聲十五音（吉川雅之）。

六朝美術の研究　　班長　曽布川　寛

一九九〇年四月から五年の計画で始まった本研究班は，六朝を中心に後漢，隋唐時代を含めた時代を扱い，この時代の美術全般についてより精確な理解をめざそうとするものである。具体的な方法としては出土文物，石窟寺院などの仏教美術，書論や画論などの芸術論を三本の柱に取り上げることにする。今年は班員及び招請研究者による各々専門分野における以下のような研究発表を行った。また併せて造像記と芸術論の会読を行い，造像記として甘粛省南石窟寺碑，崇顕寺碑（稲本泰生担当），宝山霊泉寺石窟造像記（大内文雄担当），芸術論として裴孝源『貞観公私画史』（木島史雄担当），『梁武帝與陶隠居論書啓』（下野健児担当）を取り上げた。

法顯傳研究　　班長　桑山　正進

法顯の行歴記は，當時の中央アジア，インドの佛教事情を活寫している。一九世紀の佛譯注一例，二〇世紀初めの英譯注三例，日本語譯注二例があるけれども，いずれも out of date である。當班は章巽『法顯傳校注』（上海古籍出版社，一九八五）をテキストにとりあげ，その注を讀みつつ，これらの諸譯を照合し，また『水經注』の記事を参照して，據るべき現代語譯を作成する。あわせてその内容である五世紀の中央アジアとインドを班員の専門分野

である歴史，言語，宗教，考古，美術などの多角視點をもって検討する。班員とその會讀分擔は以下のとおり。高田時雄（序から校注説明まで），森安孝夫（于闐まで），吉田豐（竭叉から陀歴まで），春田晴郎（烏萇から弗樓沙まで），小野浩（那竭から毗荼まで），定金計次（摩頭羅から沙祇大國まで），入澤崇（拘薩羅舍衞國から佛般泥洹處まで），中谷英明（毗舍離から薩沙王舊城まで），武内紹人（伽耶城から多摩梨帝まで），井狩彌介（師子國），稲葉穣（浮海東還），船山徹（高僧傳中の法顯，智嚴，寶雲の傳記），榎本文雄（經録等）。本年は入澤分擔箇所までを終了した。

前近代中国の法制　　班長　梅原　郁

前近代中国の歴史の中で「法律」がどのように形成され展開していったか，また他の歴史世界と比較してどんな特性を持っていたかといった関心のもとに，先秦時代から清代に至るまで幅広く多様な問題を追求している。共通のテクストとしては，新出の敦煌漢簡と，本所が伝統的に研究を進めている敦煌文献の法律関係の資料を使用している。

中国古代禮制研究　　班長　小南　一郎

最終年度を迎えた本研究班は，従来に引き続き，「周禮」春官篇を唐の賈公彦の疏で読み，経文および鄭玄の注に訳注を付けた。本年度は，音楽に関係する部分を読み終わり，占いをつかさどる大卜の職まで読み進んだ。

今回の研究班では，「周禮」春官篇後半の，占いや巫祝に関わる部分を読み残すことになったが，その部分の訳注作業を，将来も継続したいと考えている。また，「周禮」の輪読と並行して行われた班員の研究報告に基づき，中国の禮制，禮学，祭祀儀礼などをめぐる論文集を来年度中に出版する予定である。

明末清初の社会と文化　　班長　小野　和子

四カ年計画で始まった研究班も第三年度に入り，折り返し点に達したので，今年度は研究報告を中心に研究会を運営した。王朝交替というドラマテックな展開の中で，権力構造・政治過程・国家財政・地域社会・民衆の意識など，様々な角度から論議が深められた。

中国技術史の研究　　班長　田中　淡

本研究班は，一九九一年四月から向こう五箇年の豫定で，中國の傳統的技術の特質について，とくに生活科學・技術の關連分野を主たる對象としてとりあげながら，検討を加えてゆこうとするものである。當面，研究會は技術史全般に關わる分野を主として，關連の特定分野を副とする二本だての構成をとり，前者は元・王禎の『農書』，後者に梁啓雄輯『哲匠録』疊山篇をそれぞれテキストに選び，會讀・譯注作成をすすめてゆく豫定である。また，それと並行して，技術史の諸分野にわたる班員の研究發表を随時おこなってゆく。標記の期間に，『農書』農器圖譜・耒耜門，钁臿門，銭鎛門，杵臼門，倉廩門の譯注を白杉悦雄・黄蘭翔・福田美穂・中島長文・大平桂一・橋本敬造，『哲匠録』疊山の校補・譯注を外村中・森村謙一・小林清市がそれぞれ擔當した。

六朝道教の研究Ⅱ　　班長　吉川　忠夫

『真誥』七篇全二十巻の會讀をひき續いて行い，第十三巻・第十四巻稽神樞篇三・四の譯注を完成した。稽神樞篇は茅山の宗教地理に關する章である。

秦漢隋唐の文物資料　　班長　礪波　護

本研究班では昨年に引き続き，隔週水曜日の研究会で出土文物に関する範囲の研究発表が行われた。

中華文人の生活　　班長　荒井　健

一九九一年度より二年間，舊中國の文人の生活全般について，總合的に検討してきた本班は，今期各分野の研究報告および討議を行い，九三年三月に研究終了する。その成果は論文集「中華文人の生活」として「長物志」譯注とともに公刊豫定。

1920年代の中国　　班長　狹間　直樹

本研究会は，研究する時期を「20年代」にしぼることによって，時代史的視角，および世界史の共時的視角から国民革命期中国の諸相をとらえなおそうとしたものである。5年間の蓄積をもとに，もっか

各班員が論文の執筆にあたっており，近くその研究成果を発表することになろう。

梁啓超の研究－その日本を媒介とした西洋近代認識について－　　班長　狭間　直樹

本年度より3カ年の予定で開始した「梁啓超の研究」は，中国の近代世界認識形成，および近代西洋学術文化の摂取に多大な貢献をした梁啓超の役割に主眼をおいて研究しようとするものである。そのさい，かれが近代西洋認識の過程で主たる媒介として依拠した同時代の日本からうけた影響に意をはらい，伝統的社会に育ったかれの認識がいかに展開したのかを，多面的かつ世界的視座にたって検討していくことが必要となるだろう。本年度はかれとその経学論，法政論，経済論，宗教論，文明論，学術論等の変遷にかんして，各班員の研究報告を検討することを中心として研究班をすすめた。

中国近代の都市と農村　　班長　森　時彦

本年度から五年計画でスタートした本研究班は，都市と農村の関係を主軸にすえて，中国近代史を長いタイムスパンで縦断的にとらえなおし，前近代から現在にいたる中国社会の変動を巨視的に分析する視座の確立をめざしている。目下は助走の段階として，各班員の個人研究を所与のテーマに即して整理しなおした報告が比較的多いものの，中国からのゲストスピーカー（南京大学の茅家琦，厳学熙，浙江省社会科学院歴史研究所の陳学文，上海交通大学の厳民の四先生）がそれぞれの専門の立場から，明清から近代にいたる都市化の問題を論じて有益な示唆を与えられたのをはじめ，すでに課題の核心にせまる問題提起（中国の近代化を沿海地域の都市化と内陸地域の「農村化」との並進過程ととらえてみてはとの提案）をもりこんだ報告も出現している。

客　員　部　門

人文学のアナトミー　　班長　山田　慶兒

グランド・セオリーの有効性が疑わしくなり，人文諸科学の専門化と細分化が進んだ現在，人文学は一つの転機に立っている。この研究会は，この知的な好機をふまえながら，人文学の方法論を中心とする新しいパラダイムの構築をめざしている。そのための基礎的な作業として，人文学の諸領域においてこれまで蓄積されてきた様々の古典的テキストを新たな視点から読み直す一方で，人文学のフロンティアに立つ諸問題をソフトウェアとハードウェアの両面を見据えながら検証してきた。最終年度にあたる本年の後半からは，報告書作成にむけ，班員各自の論文要旨発表を始めている。相互の討論をさらに重ねたうえで，3年間の共同研究の成果を論文集として近く刊行する予定である。

班員　井狩彌介　上野成利　宇佐美齊　大浦康介　阪上孝　佐々木克　佐々木博光　鈴木啓司　田中雅一　谷泰　富永茂樹　藤井正人　藤田隆則　前川和也　光永雅明　山室信一（以上所内）　水嶋一憲

1993年

1月26日	「翁の文」を読む	山田
2月9日	能のワキをめぐる問題	藤田
2月23日	ネイションとは何か	水嶋
3月9日	外国文学研究は無意味である（！？）	大浦
5月18日	ニューアトランティスとその周辺	富永
6月1日	社会（思想）史をどう書くか	光永
6月15日	古典インド法典と「法（ダルマ）」の概念の展開	井狩
7月6日	基礎論について	鈴木
7月20日	研究の方向をめぐって	全員
9月21日	学問はいかにして成立可能か－仲基の言語批判と相対主義の立場	富永
	インテレクチュアルズの誕生	山田
		光永
10月5日	古代インド宗教歌詠の思想性－哲学生成の一段面	藤井
	人文学と「他者」	水嶋
10月19日	言語世界と関与主体－笑い表象の自己言及的文脈指示機能の考察から	谷
	古典ヒンドゥー法典編纂の手法，あるいは編纂者の思考法についての試論	井狩
11月16日	基礎論について－数学と哲学を題材	

に　鈴木
能という歌舞の中の演劇的表象　藤田
11月30日　文学についての学は可能か－漱石にみる文学と科学　大浦
「都市革命」あるいは都市社会の成立－古代メソポタミアにおける　前川
12月14日　詩歌の起源と転変－比較詩学の視座を求めて　宇佐美

Ⅱ　個人研究

日　本　部

日本ファシズムの研究　古屋　哲夫
日本近代文化史の研究　飛鳥井雅道
廃藩置県の研究　佐々木　克
植民地経済の研究　山本　有造
文化史および文明史としての国民国家の形成　横山　俊夫
日本近世社会における政治権力　藤井　譲治
政治文化の中の社会理論　山室　信一
近代朝鮮の政治と社会　水野　直樹
日本近世の地域社会の研究　塚本　明
士族の研究　落合　弘樹
文学と近代　齋藤　希史
貨幣の研究　安冨　歩

西　洋　部

西洋論理思想史　山下　正男
社会的相互行為の解読　谷　泰
思想と制度　阪上　孝
シュメール行政・経済文書の研究　前川　和也
インド世界の儀礼の研究　井狩　彌介
フランスの詩学　宇佐美　齊
群衆現象の社会学　富永　茂樹
南アジアにおける宗教と社会　田中　雅一
文学理論の研究　大浦　康介
後期ヴェーダ文献の成立史研究－ブラーフマナからウパニシャッドへ－　藤井　正人
デカダンス文学における自己矛盾の研究　鈴木　啓司
音声形式の記述と分析　藤田　隆則
フレデリック・ハリソンとイギリス実証主義　光永　雅明
ドイツ中世のエトノス　佐々木博光
フランクフルト学派の政治思想　上野　成利

東　方　部

宋代の官僚制度　梅原　郁
六朝隋唐精神史　吉川　忠夫
隋唐政治社会史研究　礪波　護
五四時期中国社会主義の研究　狹間　直樹
インド亜大陸北西地方の歴史考古学研究　桑山　正進
古代中国における説話伝承の研究　小南　一郎
東林党の研究　小野　和子
原始佛教起源論　荒牧　典俊
中国中世土地所有制の研究　勝村　哲也
六朝道教思想研究　麥谷　邦夫
中国美術の様式と意味　曽布川　寛
中国建築の様式・技法・空間　田中　淡
近代中国の綿紡織業　森　時彦
敦煌文書の言語史的研究　高田　時雄
中国古代中世の法制　冨谷　至
先秦時代の金文　浅原　達郎
漢唐間における天文学と文化　新井　晋司
イスラーム勢力進出期のアフガニスタン・北インド　稲葉　穣
唯識思想研究　船山　徹
中国共産主義運動の歴史と思想　石川　禎浩
唐宋時代の士人　中砂　明徳
宋元道教研究　横手　裕
明清時代の官僚制度　谷井　陽子
六朝時代學術史の研究　木島　史雄
中国の伝統的品詞観　森賀　一惠
中国仏教美術の研究　稲本　泰生
高麗及び朝鮮官僚制の研究　矢木　毅

事　業　概　況

夏期公開講座

1993年7月　於　本館大会議室

－絵とうた…文化の現場を読む－

9日　歌い手たちの変貌－能の「コロス」とその意味づけ－　藤田　隆則

聖歌から聖音へ－古代インド宗教歌詠の思想性－　藤井　正人

詩のことば－リュートからイメージへ－　宇佐美　齊

10日　漢代画像石墓の世界　曽布川　寛

仏像の出現－それは大乗経典にかかわらないか－　荒牧　典俊

天皇の図像－錦絵から御真影へ－　佐々木　克

開所64周年記念公開講演会

1993年11月11日　於　本館大会議室

貨幣の自生と自壊　安冨　歩

木札に書かれた中国古代　冨谷　至

論理学と私　山下　正男

研究成果の刊行

I　紀　　要

人文学報　第72号

韻文詩翻訳の二つの可能性－上田敏と柳澤健による LE BATEAU IVRE 翻訳の試み－　宇佐美　齊

門司駅員の引責自殺と山川健次郎言責事件－二つの忠君愛国をめぐって－　小股　憲明

慶長期近江国の支配－「国奉行」米津親勝をめぐって－　藤田　恒春

友愛と隷従－ラ・ボエシー『自発的隷従論』の問いをめぐって－　水嶋　一憲

満業の資金調達と資金投入　安冨　歩

ヨーロッパ思想とアジア思想の構造的同一性について　山下　正男

彙報（1992年1月～1992年12月）

東方學報　第65册

中國遼東半島的史前文化　安　志敏

漢代畫像石における昇仙圖の系譜　曾布川　寛

神享壺と東呉の文化　小南　一郎

チベット文字書寫「長巻」の研究（本文編）　高田　時雄

6－8世紀 Kāpiśi-Kābul-Zābul の貨幣と發行者　桑山　正進

「宋史刑法志」譯注稿（下）　「中國近世の法制と社會」研究班

復社姓氏校錄附復社紀略　井上　進

彙　報（1992年1月～1992年12月まで）

ZINBUN（欧文紀要）No. 27

Yves-Marie Allioux, Poésie française, poésie japonaise:une sphére commune?

Yasusuke Oura, Narrateur e(s)t personnage＜Ⅲ＞

Toru Funayama, A Study of *kalpanāpodha*: A Translation of the *Tattvasamgraha* vv. 1212-1263 by Śāntaraksita and the *Tattvasamgrahapañjikā* by Kamalaśīla on the Definition of Direct Perception

Institute for Research in Humanities, Staff and Seminars:1992

II　研究報告その他

法的思考の研究　山下正男編
1993年1月27日刊

「満州国」の研究　山本有造編
1993年3月31日刊

中國近世の法制と社會　梅原　郁編
1993年3月31日刊

中國中世の文物　礪波　護編
1993年3月31日刊

所報「人文」第39号
1993年3月31日刊

所　員　動　静

・荒井　健（東方部）教授は，停年退官（3月31日付），京都大学名誉教授の称号を授与（4月1日付）。

・阪上　孝（西洋部）教授を当研究所所長及び附属東洋学文献センター長に併任（4月1日～1995年3月31日）。

・山田慶兒国際日本文化研究センター教授は，併任教授（西洋部）。（比較文化研究部門，4月1日～1994年3月31日）。

・岸本美緒東京大学助教授は，併任助教授（東方部）。（比較文化研究部門，4月1日～1994年3月31日）。

・礪波　護（東方部）教授は，文学部教授に配置換（4月1日付），併任教授（4月1日～1994年3月31日）。

・宇佐美　齊（西洋部）助教授は，教授に昇任。

・藤井正人大阪大学文学部助手は，当研究所助教授（西洋部）に昇任。

・矢木　毅氏を助手（東方部）に採用。

・上野成利氏を助手（西洋部）に採用（以上4月1日付）。

・水野直樹助教授（日本部）は，1992年8月10日伊丹発，スタンフォード大学，ハーバード・エンチン研究所に於いて朝鮮近代史，東アジア関係史に関する研究及び研究資料蒐集を行い，9月7日帰国。

・齋藤希史助手（日本部）は，1992年8月28日伊丹発，北京大学に於いて中国文学理論史に関する研修及び研究資料蒐集を行い8月11日帰国。

・谷　泰教授（西洋部）は，1992年12月23日成田発，ミラノ大学に於いてイタリア・サンドリオ周辺での民族学的調査及び研究資料蒐集，マンチェスター大学に於いて研究論文発表のための打ち合わせを行い，1月10日帰国。

・田中　淡助教授（東方部）は，1月8日伊丹発，客家土楼，姑嫂塔，開元寺等に於いて中国の古建築調査及び研究資料蒐集を行い，1月17日帰国。

・小野和子教授（東方部）は，3月19日伊丹発，寧波大学，上海図書館に於いて1993年浙東学術国際研究討論会出席及び東林党に関する研究資料蒐集を行い，3月31日帰国。

・佐々木博光助手（西洋部）は，文部省在外研究員旅費により，3月25日成田発，マックス＝プランク研究所に於いてドイツにおける種族意識の形成過程に関する研究を行い，1994年1月24日帰国。

・田中雅一助教授（西洋部）は，国際協力事業団負担により，4月8日伊丹発，ゴール，コロンボ水産省に於いて漁村の調査及び調査報告を行い，4月29日帰国。

・横山俊夫助教授（日本部）は，5月30日伊丹発，チュービンゲン大学日本文化研究所に於いて「日本の礼法」に関する講義を行い，7月4日帰国。

・前川和也教授（西洋部）は，文部省国際研究集会派遣研究員旅費及び人文科学研究協会負担により，6月30日伊丹発，ライデン大学に於いてシュメール農業研究グループ集会出席・報告，大英博物館に於いてシュメール学に関する研究調査及び研究資料蒐集を行い，7月24日帰国。

・桑山正進教授（東方部）は，7月4日伊丹発，ヘルシンキ大学ボルタニア校舎に於いて南アジア考古学者ヨーロッパ協会第12回国際集会出席，ヴィクトリア・アルバート博物館に於いてガンダーラ彫刻に関する研究資料蒐集を行い，7月14日帰国。

・谷　泰教授（西洋部）は，7月18日伊丹発，仏社会科学高等研究院歴史研究センター，パリ高等研究院，ミラノ大学に於いて人・家畜間関係についての文献資料蒐集及び調査を行い，8月19日帰国。

・田中　淡助教授（東方部）は，委任経理金により，8月22日伊丹発，香港大学に於いて第34回アジア北アフリカ国際会議出席及び食物史に関する研究資料蒐集を行い，8月28日帰国。

・小南一郎教授（東方部）は，9月2日伊丹発，中国社会科学院文学研究所に於いて1993・中国古代小説研討会にて論文発表を行い，9月12日帰国。

・曽布川　寛助教授（東方部）は，9月4日伊丹発，龍門石窟研究所，陝西省歴史博物館，兵馬俑坑博物館等に於いて龍門石窟1500周年国際学術討論会出席及び中国美術に関する研究資料蒐集を行い，9月24日帰国。

・横手　裕助手（東方部）は，文部省科学研究費補

助金により，９月９日成田発，上海白雲観，杭州抱朴道院，金華山等に於いて道教に関する調査及び研究資料蒐集を行い，11月11日帰国。

- 荒牧典俊教授（東方部）は，９月29日伊丹発，インド国際センターに於いて「環境問題及び佛教の貢献」シンポジウムに出席し，10月８日帰国。
- 桑山正進教授（東方部）は，10月22日成田発，タフテバヒ遺跡，スワート寺院，シンガポール国立大学等に於いてガンダーラ遺物及びガンダーラ仏教に関する調査及び研究資料蒐集を行い，11月19日帰国。
- 稲葉　穣助手（東方部）は，11月５日成田発，スワート寺院，ペシャーワル大学，タキシラ遺跡等に於いて仏教寺院及びタキシラ遺跡に関する遺跡調査ならびに初期イスラム時代に関する写本及び遺物調査を行い，11月21日帰国。
- 田中雅一助教授（西洋部）は，委任経理金により，11月６日伊丹発，マドラス大学，タミル大学，デリー大学に於いて寺院儀礼と家庭祭祀の供物の人類学的研究を行い，12月16日帰国。
- 横山俊夫助教授（日本部）は，11月14日伊丹発，ウィーン大学，国立工芸美術館，ブリギッテナウ国民大学校等に於いて1873年ウィーン万博に関する資料調査及び学術情報交換等を行い，11月23日帰国。
- 狭間直樹教授（東方部）は，11月22日伊丹発，広東大厦ホテル，新会学術会議場，南海学術会議場に於いて「戊戌后康有為梁启超与維新派」国際学術研討会に参加し，11月27日帰国。
- 齋藤希史助手（日本部）は，11月21日伊丹発，広東大厦ホテル，新会学術会議場，南海学術会議場に於いて「戊戌后康有為梁启超与維新派」国際学術研討会参加，香港中文大学に於いて中国近代文学に関する研究資料蒐集を行い，12月１日帰国。
- 高田時雄助教授（東方部）は，11月24日伊丹発，北京大学，新疆ウイグル自治区文化庁に於いて新疆出土寫本に関する研究資料蒐集を行い，12月24日帰国。